
破滅へのカウントダウン

ryouta

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

破滅へのカウントダウン

【Nコード】

N0443A

【作者名】

ryouta

【あらすじ】

コナン、哀の正体が少年探偵団、高木刑事にばれる！？そして2人に黒の組織の魔の手が……。2人は組織を倒し、自らの姿を取り戻せるのか！！

第一章・・・名探偵光彦

ここは夏休みの光彦宅。時計は十一時を指していた。家には元太、歩美が来ていた。

光彦はゲームをしている元太、歩美に向かってふつと声を漏らした。
光彦「コナン君って誰なんだろう・・・」

歩美「どういう意味？」

光彦「えっ、あーそ、それは・・・コナン君ってただの小学生ではないですよ」

元太「な、何いってんだあ？」

元太は相変わらず話についていってなかった・・・

光彦「要するにですね、おかしいんですよ！！コナン君。普通の小学生では

ないっていうことで・す・よ・！・！・！」

光彦は「ですよ」を強調させていていた。

光彦「僕の推理を聞いて下さい。まずコナン君はあの高校生探偵、工藤新一さんなんです。

博士の作った薬で体が縮んだ」

歩美「なんで薬を飲んだの？」

光彦「まあ、命を狙われて正体を隠すために飲んだんでしょう」

元太「それに、何で薬をのんで体が縮むんだ？そんな薬、この世に存在するの？」

光彦「・・・」

歩美「そんな事、ありえるわけ無いよ」

光彦「最後まで推理を聞いて下さい！！」

光彦は怒ったかのようにいった。動物にたとえたら獲物を捕らえる

時のライオンだ。

元太「そんなに怒るなよ。おつかねーぞお」

光彦「聞いて下さい!!!」

またライオンのようにいった。二人は声をそろえていった。

元・歩「わ、わかった・・・」

光彦は「わかった」という言葉を聞くと光彦は再び推理を始めた。

光彦「コナン君が、工藤新一。というのには今まで、数々の失言や行動があるんです。」

一つ目は西の高校生探偵、服部平次さんはコナン君のことを工藤って呼んでるんです」

歩美「あーっ、知ってる」

元太「俺も知ってるぞ」

光彦「二つ目、博士はコナン君のことを新一と呼んでます」

歩美「他には？」

光彦「はい、三つ目はコナン君、灰原さんが転校してきたときに少年探偵団が依頼受けたじゃないですか。」

その時、コナン君はこういいました。”俺を薬で小さくした黒ずくめの・・・”とね」

歩美「あー、言った言った」

光彦「最後に、灰原さん。灰原さんもちっさーくなつた」

少年探偵団の三人は光彦の推理を一時間聞いた後、コナンの正体を暴くためにある作戦に出る少年探偵団であった。

第一章・・・名探偵光彦（後書き）

初めまして、作者のryoutaです。

誤字脱字があるかもしれませんがヨロシクお願いします。

題名の「破滅のカウントダウン」という意味は今後分かるかもしれません。

第二章・・・高木刑事の推理

光彦・元太・歩美がコナンの話をしていたとき・・・

ここはトロピカルランド。佐藤刑事、高木刑事がデートしていた。
・・・数百人の佐藤刑事ファンが監視していることは言うまでも無いが・・・

高木刑事はなにやら浮かない顔をしていた。佐藤刑事は不思議そうにその様子を見ていた。

佐藤「高木君どうしたの？浮かない顔して」

高木「いや、なんでもないですよ。あはははは・・・」

高木刑事は佐藤刑事の事が嫌いなのか・・・いや、違う。江戸川コナンの事だ。

「コナン君・・・工藤君なのかなあ・・・」そんな事を悩んでいた。

観覧車に乗っても、ジェットコースターに乗っても、何をしても浮かない顔をしていた。

デートをした後、帰り際。電車の中で、急に高木刑事は

高木「言うしかない!!」

と言った。佐藤刑事、さすが刑事の耳(?) いや地獄耳と言ったほうがいいだろう。

呟いたように言った高木刑事の言葉を耳でキャッチした!!

佐藤「ねえ、高木くん?なにを言うの?私にいけない事なんて無いわよねえ」

さすが刑事、と言っていいだろう。取調べの時に言った。

第二章・・・高木刑事の推理（後書き）

どうも、作者のryoutaです。

今度は高木刑事がコナンのことを・・・

今回はそのことをコナンが知るかもしれない！！

第三章・・・組織行動開始！！

電話の主は博士だった。

コナンは受話器をとった。

コナン「ハイもし・・・」

コナンの声を掻き消すように博士の声が聞こえた。

いつもの博士とは違う、焦った口調だった。

博士「し、新一か。た、た、大変なんじゃ」

コナン「何だよ、そんなに焦って」

博士「なにやら、そ、そ、組織が、新一の、いや、毛利君の解決させた

事件を調べているみたいなんじゃ・・・ハアハア・・・」

コナン「博士、そんなに焦るなよ。どうやって事件を調べてるんだ」

博士「いついや・・・ち、調書が盗まれてるんじゃ」

コナン「いつ盗まれたんだ？」

博士「ここでは話づらいからの。とにかくこっち（阿笠邸）にきてくれ」

コナン「わかった・・・」

コナンは電話を切った。コナンの拳は震えていた。

コナンは事務所を飛び出した。走って阿笠邸に向かっていたコナンは思考回路をめぐらせた。

なぜ資料を、組織はなぜ調べだしたのか、と。コナンのたどり着いた答えはただ一つ。

・・・組織はコナンの正体にうすうす感じている・・・

阿笠邸に着いたコナン。

コナン「入るぞー」

呼び鈴も鳴らさず。返事も聞かずにコナンは入っていった。

コナンはリビングに歩を進めた(？)

リビングに入ると博士がコーヒーを飲んでいた。

黒いTシャツとデニムのジーンズを身にまとった灰原哀が地下の研究室から出てきた。

哀は「あら、工藤君」とでも言いたそうな表情だった。まあ当然だろう。

朝から地下に籠りっぱなしだから。

哀「紅茶飲むかしら」

コナン「ああ。頼む」

一分ほどで紅茶を二つ持った哀がやって来た。

コナン「サンキュー」

しばらく黙っていた博士が口を開いた。なにやら重々しい雰囲気だ。

博士「電話の続きなんじゃが。昨日の夜十一時、調書を取りにいった高木刑事が気付いたそうじゃ。

捜査資料は二百冊ほどごっそり無くなっていた。すべて毛利君いや、新一のかかわった事件の調書

じゃった。目暮警部の話だと、盗まれた時間は昨日の九時から十時半の間。指紋は消されていたらしい。

目暮警部は毛利君の恨みを買った人物か、熱烈な毛利君のファンと考えているらしいがお。

本当は組織じゃあないかな。と思つてのお」

コナン「調書が盗まれたのは初めてじゃあないし、一回目もおそらく組織の仕業だったから俺に伝えたってワケか」

博士「まあそういうことなんじゃ。もしかしたら新一もつを狙つてるかもしれん。注意するんじゃよ」

博士の言葉を聞いたコナンは半分ほど残っていた紅茶をゴクリと飲み干すと玄関のほうへ向かおうとしていた。

すると「……………博士が叫ぶように言葉を放った。

博士「新一いつ……………一つ言い忘れていたことがある」

コナン「あんだよ博士」

博士「少年探偵団の三人」

コナン「元太たちか」

博士「おお、あの三人が新一の正体に気づいてるんじゃない」

コナン「心配すんな、どうせあさはかな考えだから」

そうやって言うとは足早に阿笠邸をさった。

……翌日……

十時の毛利家。蘭の大きな声の家、いやこの建物じゅうに響き渡った。

蘭「おとーさん！コ・ナ・ン君！！もう起きてよ！！今十時なんだよ！！！！」

このドスのきいた声によって遭えなく二人はお目覚めとなった。

二人はおなじ体勢で歯を磨き、リビングに向かっていった。向かう足取りは重かった。

二人とも蘭にたたき起こされたから機嫌は最悪に悪い。

朝ごはんがリビングのテーブルに並んでいた。

ご飯に味噌汁、鰯の開きと漬物が今日の朝飯らしい。普通の朝ごはん。

今にも眠りそうな目のコナンと小五郎。

蘭「あつ、そうそう今日あさ九時頃に電話があったの」

コナン「誰から？」

蘭「高木刑事から。コナン君に用があるんだって」

コナン「んじゃあ、いつ、何時に、どこに行けばいいの？」

相変わらず子供の”ふり”がうまい！！

蘭「あのね、今日十一時に警視庁に来て欲しいんだって」

コナン「えっ、僕？」

小五郎「どおーせ誘拐されそうになった事件だろ？（四十二巻参照）

蘭「と・に・か・く！！！急いで食べてくれない、今日十時半から園子とシヨッピンングするんだから」

時計は十時二十分を指していた。後十分で待ち合わせ時間だから怒るのは当然だ。

コナン、小五郎はさっさと朝食を済ませてコナンは警視庁へ行く準備、小五郎は浮気調査へいく準備をしていた。

コナンは着替えをして、毛利家を出た。これから起こる事をまったく知らずに・・・

・・・・・・続く・・・・・・

第三章・・・組織行動開始！！（後書き）

第三章でとうとう黒の組織についての話が出てきましたね。

さて高木刑事は何のようがあるのでしょうか！！

気になる人は次回をみてね！！

第四章・・・ばらす

コナンは高木刑事から電話があつたと聞き、十時半ごろに居候中の毛利事務所を出た。

早く出た成果か十時四十五分ごろについた。

コナン「さすがに早かったか・・・あつ、高木刑事だ」

高木「コナン君早いねー。じゃ、いこうか」

そういうと警視庁付近の喫茶店「金田」に入った。

店内はレトロな雰囲気で、コーヒーのいいにおいが充満している。

コナンの好きな雰囲気だ。

高木「このマスター知り合いなんだ」

コナン「へえー」

高木「まあ座って」

高木はコーヒー二つを頼んだ。コナンは何でコーヒーを二つ？子ども扱いをしているのならば

オレンジジュースを頼むはず・・・まあコナンは今年で十歳（

ココロは二十歳）だから

まあそれほどコナンは気にも留めなかった。

五分ほど経つと白いコーヒーカップに注いだコーヒー二つをマスターが持ってきた。

マスター「注文はもういい？」

高木「はい」

コナンはその会話も聞いてか聞かずか大好きなコーヒーを飲んでいった。ブラックで・・・

高木「コナン君、コーヒーが好きなんだね」

コナン「うっ、うん」

コナンはいつもと違う高木の鋭い目に驚いた。

「うっ、うん」を最後に沈黙が続く。聞こえるのはコーヒーを飲む

音のみである。

コナン「・・・・・・・・・・」
高木「・・・・・・・・・・」
コナン「・・・・・・・・・・」
高木「・・・・・・・・・・」
コナン「・・・・・・・・・・」
高木「・・・・・・・・・・」
コナン「・・・・・・・・・・」
高木「・・・・・・・・・・」
コナン「・・・・・・・・・・」
高木「・・・・・・・・・・」
コナン「・・・・・・・・・・」

五分ほど沈黙が続いたがある一言で一気に騒がしくなる。

高木「相変わらず、コーヒーが好きなんだね工藤君」

高木はコナンの事を「工藤君」といった。ハッキリと。そういった後の高木の目は自信に満ち溢れていた。

コナンは何か思ったようにすくつと立ち上がった。

コナン「ちよつと電話していいですか？」

高木「いいよ」

そうやって高木が言うとコナンは喫茶店を出た。

カランカラン・・・・・・・・

コナンはポケットからさつと携帯電話を出すと阿笠邸の電話番号をブッシュした。

ピッポッパッポッパッパ・・・・・・・・

阿笠邸

コナンがコーヒーを飲んでいるころ阿笠邸では昼食の用意をしていた。

哀「博士ー少しは準備手伝ってくれない」

キッチンから哀が出てきた。そして博士から子機を貰った。

哀「代わったけれど」

コナン『おお、灰原か。実は……高木刑事からオレの正体がばれかけているんだ』

哀「んで」

相変わらず冷静な口調で全く驚いていない。博士とは凄く違いようだ。

コナン『オレは出来る限りオレが工藤新一だつてことはばれないようにするつもりだ。で

も、もう無理だと思つたらもう全て包み隠さず言つつもりだ。それでもいいか？』

哀「貴方が決めたんだからいいんじゃないの。私がとやかく言うことではないわ」

コナン『あと、もう一つ』

哀「なに？」

コナン『もし、高木刑事に話す事になったらお前の事も言っているか？』

哀「もし、貴方の事いつたら、私は無関係。では済ませられないでしょう」

コナン『おお、そうだったな。んじゃ、これ以上長電話したら高木刑事にもっと疑われるから』

コナンは電話をすばやく切った。

喫茶店「金田一」

コナンが電話を切ると再び「金田一」に入った。

カランカラン

喫茶店に入ると高木がすぐに喋りだした。

高木「さっきの質問の答え。聞いてなかったね」

コナンはすぐさま「僕はただの小学生だよ」といおうと思ったが組織が行動を始めていたので

すべて話して刑事たちに協力してもらったほうがいいのではないか。という考えが脳を駆け巡った。

しかしやっぱりまだ正直に言うわけにはいかない。

コナン「僕はただの小学生だよ」

高木「どうして騙すんだい？僕は君に百パーセント協力するんだよ」

コナン「じゃああなたにはわかんないんだよ！！いま、高木刑事が知ったらあなたの命が奪われかねないんだ！！」

あなたはいつ死ぬか分からないんだよ。それでもいいのか！！！！」

コナンは怒っていた。

高木は驚いていた。

沈黙が一分ほど続いた。

コナン「すいません。つい……」

高木「いいんだよ。話してくれるかい」

コナン「はい」

高木「んじゃ、警視庁に言って話そうか」

コナン「はい」

高木はマスターに代金を払うと足早に警視庁に向かった。

すぐに警視庁に着いた。

警視庁は結構キレイで警察の人はあまりいなかった。

それは、強盗、引ったくり、空き巣や汚職などなどの捜査で出払っ

ているからだ。治安が悪い。
捜査一課も皆、最近起こった強盗事件のため、出払っている。居るのは目暮警部と刑事三人だった。

コナンは眼鏡を外していた。もう偽る必要は無かったからだ。

高木刑事は目暮警部を呼んだ。

高木「警部。ちょっと話が」

目暮「なんだ高木君。君は非番だったんじゃない……まあいい」

目暮警部は廊下に向かってきた。

目暮「なんだね。おお、コナン君。今日あの眼鏡は？」

コナン「もう必要なくなりましたから」

高木「良ければ取調室が良いんですけど……」

目暮「わっ、わかった……」

目暮警部の目は不思議！という目だった。それは当然だ。コナン君が、取調室で……事情聴取???

一分ほどで取調室についた。取調室は机にパイプ椅子二つという所。決して子供が入る所ではない。

コナンは窓際の席に、目暮警部はドア側の席に座った。高木は立っている。

目暮「話ってなんだい」

コナン「実は僕、く、工藤新一なんです……」

コナンの声はいつもより低かった。

目暮「なんだって……」

コナンは全て包み隠さず話した。

トロピカルランドでの出来事

組織の存在

なぜ毛利探偵事務所にもぐりこんだか

阿笠博士のメカの数々

榊山憲三の正体（二十四巻参照）

そして………

コナン「毛利探偵の推理は全て僕の推理なんです。まず事件の真相が分かったらこの時計型麻醉銃で眠らす」
そういうと腕時計を見せた。

コナン「んでこの蝶ネクタイ型変声期で毛利探偵の声で推理する」

目暮「なっ、なーんじゃってえー」

高木「あの帝丹高校の学園祭の時は、どうしたんですか？」

コナン「ああ、灰原の力を借りたんです」

高木「ああ、あのクールな女の子だね」

コナン「はい。その子も小さくなっただんです。彼女の本名は宮野志保。組織で体が小さくなる

APT X 4869という薬を作っていたんです。ところがある日、姉が殺されて組織に不安を抱いた。

そして彼女はあの薬を作らない、という組織への対抗手段をした。そうしたら組織に牢屋に手錠でつながれてしまった。

彼女は隠し持っていたAPT X 4869を飲んだ。そうしたら体が縮んで手錠が外れたというわけです。あの事件の時は灰原が

コナン役をしたんです。僕はその薬の試作品を飲んで元に戻るこ
とができた」

目暮「………」

目暮警部は驚いて声も出せなかった。

しかし、高木は冷静だった。

高木「そうしたら組織は手錠から脱出した宮野という子と工藤君を探している。というわけですね」

コナン「はい……………」

高木「そんな事があつたんだね」

目暮警部はやっと声が出せるようになった。

目暮「その、組織とやら？なんとやらが、コナン君の正体を知られないために、江戸川コナンという偽名で生活したんだね」

コナン「はい……………」

コナンはとうとう言ってしまった……………

正体を……………

まさか……………取調室に盗聴器が仕掛けられているなんて……………

コナンは知る由も無かった……………

コナンに悪魔の手が近づいている事も……………

……………続く……………

第四章・・・ばらす(後書き)

ども作者のryoutaです。

こんなに駄文ですいません・・・

最後まで読んでいただけると嬉しいです。

感想を掲示板に送ってください。

送っていただくと嬉しいです。

でわ・・・

第五章・・・偽りの和田刑事

？「兄貴、シエリーがとうとう尻尾を出しましたぜ」

？「そうか・・・」

？「それと、工藤新一というボウズも、尻尾を出しましたぜ」

？「あの出来損ないの名探偵を飲ませたあいつか」

？「けど、奴等は出来損ないの名探偵で体が縮んでしまったそうですぜ」

さつきから”？”で現しているのは・・・

そう、ジンとウォツカである。

ジン「そうか・・・まあいい、時機に奴等の居場所を突き止めてやるからな・・・」

そういうとジンは吸っていたタバコを地面に捨てて靴で踏み潰した。ウォツカ「もうそろそろ行きましょう。兄貴」

そういつたらジンの愛車、ポルシェ356Aに乗って行ってしまった・・・

それから七日後の八月五日・・・警視庁・・・

警視庁の会議室にはコナン、目暮警部、高木刑事、後、千葉刑事と
新米刑事の多摩川悟刑事と

同じく新米の和田^{わたたかし}隆史刑事がいた。

多摩川刑事はすらっとしていて、身長は百八十センチくらいの青年、という印象で

和田刑事は中肉中背のサラリーマン、という感じだ。

千葉刑事は、七日前からのコナンと目暮警部の会話を聞いていて、なにやら

違和感、というものを感じたらしい。それに高木刑事とこれまたコナンとの会話

を聞いても同じものを感じたそうだ。

その理由^{ワケ}を聞くためにここ数日その事を何度も聞いた。しかし、答えは一つだった。

Need not to know(ニード ノット トウ ノウ

|| 知る必要の無い事)

その答えを聞くために今日もコナンと目暮警部、高木刑事を会議室に呼び出した。

その前にも、千葉は彼のルームメイトが犯人だった事件(四十四巻参照)の時もコナンの

推理に驚いていた。普通の小学生ではない、と思っていた刑事の一人。

.....とかなんとか説明しているうちに千葉と高木は口論になっっていた。

千葉「おい!!オレに言えない事なんてあるのか!!高木!!」

高木「だからそんな事無い、って言ったじゃないか!!」

事の重大さに気付いた目暮警部は必死に止めにかかる。が、しかし.....

目暮「おい、二人とも.....止めんか!!」

千・高「警部は黙って!!」

そこにコナンが口を開いた。

コナン「じゃあ、理由が聞きたいんなら教えますが……
一つ、確かめたい事があります、千葉刑事、この秘密を知ったらど
んな事になっても、

いいですか？いくら命を落としかねない、と知っても……
後悔……しないで下さいよ……」

千葉「はい……」

コナン「では、話します。まず僕の正体。僕は工藤新一なんです。
実は……トロピカルランドでの事件知ってますか？（一巻参照）
……」

コナンは全て包み隠さずに話した。

トロピカルランドでの出来事

なぜ探偵事務所に潜りこんだか

毛利探偵が急に名探偵になった理由

灰原哀の正体

目暮警部に話した時よりも詳しく事細かに……

千葉は口をあぐりして聞いていた……

コナンは一つ失敗を犯していました……

和田隆史という謎の新米刑事に話してしまった事……

和田は不敵な笑みを浮かべていた……………

この笑みの理由とは？

一方ここは阿笠博士の家……………

家には博士、哀の他にも元太、歩美、光彦の三人が来ていた。おそらく第一章の最後に言ったあの作戦を実行するのである。歩美達は今日、八月五日の朝八時から阿笠の家に来ている。今は十一時だ。もう三時間も待っている。

哀は来た当時から

「江戸川君は九時から警視庁に行っているから昼過ぎまで帰っていない」と言っている。

しかも、探偵事務所で待てばいいのにここで……………

ピンポン……………ピンポン……………

玄関のチャイムが鳴った。

博士は玄関に向かった、

玄関には高木刑事とコナンが立っている。

博士は二人を招き入れた。

高木刑事は仕事のよういつものスーツを着ている。

コナンは、半袖のTシャツに半ズボンというラフな格好だ。
高木刑事とコナンはリビングに向かった。

廊下を曲がってリビングに入ろうとしたその時

「……あーっ、高木刑事!!」

高木刑事は子供三人を見たらはあーっの一つ溜息をついた。

高木刑事はあの三人はどーも苦手なんだろう。

高木「あの……灰原さんに阿笠^{ひさし}博士さんですね？」

博・哀「はい」

高木「ちよっとお聞きしたい事が二三個有るのでちよっとなんかまで

……

コナン君も……」

博・コ・哀「分かりました」

博士「では、光彦君らは、帰ってもらおうかのぉ」

博士がそういうと、三人は当然のように……

光・元・歩「……えー……」

光彦「灰原さんとコナン君に何の用があるんですか？」

歩美「コナン君なんか悪い事しちやっただのー？」

元太「そーだそーだ、何の用があるっていうんだよ」

哀「とにかく私たちはこれから行く所があるから三人は帰ってくれ

ない？」

哀の大人びた口調に歩美たちは反論する事ができなかった……

……

光・元・歩「……はい」

ブロロロロロロロロ……

ここは覆面パトカー……高木刑事の運転する車の中……

四人（高木・博士・哀・コナン）は無言のまま近くの喫茶店に向か

っていた。

博士の家から車で十分の所にある喫茶「4869」に着いた。
4869とはシャーロックホームズのファーストネーム、シャーロ
ック

の語呂合わせである。決して”ヨロシク”では無い……

まあそんな事はどうでもいいが……四人は店内に入った。

店内はとつても落ち着いた雰囲気、コーヒーの匂いがプンプン鼻
に来る。

店内に入ってコーヒーを四つ頼んだ。

店内に客は一人も居なかったみたいだ。

五分ほどでマスターらしきおっさんがコーヒーを四つ持ってきた。

コーヒーを皆が一口飲むと一緒に「おいしー」といった。

コナンがコーヒーを飲み干すと同時に高木刑事が話しを始めた。

高木「ここに呼んだのは三人に組織の事を聞きたくて……」

高木刑事はこそこそといった。

高木「哀さん。あなたの本名は？」

哀「宮野志保……」

高木「じゃあ宮野さん、あなたが組織に嫌気がさした理由は」

哀「私の姉は組織の手にかかって死んだ。私はその理由を組織に聞
いたが

答えてはくれなかった。まあそのほかにもAPT X 4869を組織
が勝手に使ったのも

有ったけどね……」

高木「その続きは……」

哀「そしてその正式な答えが得られるまで薬の研究を中止する事に
した……」

組織に歯向かった私は当然研究所のある個室に拘束され……

私の処分が決定するまで拘束されるハメになった。どうせ殺されるならと思って飲んだのは

隠し持っていたAPTX4869・・・

死のうと思つて飲んだ薬は私の体を縮めさせて手錠から私を解放し個室から脱出できたの」

高木「では何故阿笠さんのところに？」

哀「組織から逃げた私の唯一の頼りは工藤君だけだった。工藤君の家の前に来たところで

私は倒れたの。その時、博士が拾ってくれたの」

高木「へえー」

高木刑事がへえーといったほぼ同時に高木の携帯電話が鳴った。

RRRRR・・・RRRRR・・・RRRR・・・

電話の主はいつたい誰なのか？

和田という刑事の本当の姿とは・・・

気になる人は次回を！！

・・・続く・・・

第六章・・・組織の企み

RRRRRR・・・RRRRRR・・・RRRR・・・

高木刑事の携帯電話のベルが鳴った。

高木刑事の携帯の着信音はごく普通の電話の音だ。

仕事で使うからだろう。たぶん・・・

高木刑事は電話に出た。電話の相手は目暮警部らしい。

高木「はい、高木ですが・・・」

目暮「たっ、高木君！！そ、組織のしたっばが群馬県で逮捕された
そっだ！！」

高木「なんですってー」

高木「はい・・・はい・・・はい・・・分かりま
した」

コナン「誰からの電話ですか？」

今高木はコナンの正体を知っているので工藤新一のありのままを出
せる。

高木「警部からだったよ・・・工藤君」

哀「んで・・・何って言ったの？凄く驚きようだったけど・・・
」

哀は鋭い口調で言った。当然高木は太刀打ちできない。

高木「警部からだね・・・組織の下っ端が捕まったって・・・
双宝町で・・・

いま・・・警視庁に連行されているって

哀・コ・博「なっ、なんだってえー！！」

三人の息はピッタリだ。「なっ、」と躪いた所までピッタリである。

高木「とにかく行きましょう。警視庁へ！！」

四人は車に乗り込んだ……
乗り込んだ時には十二時になっていた……

高木は右足でアクセルを踏む……
車は駐車を飛び出した……
車はどんどん加速していく……
十分ほどで警視庁に着いた……

警視庁に着いた時、目暮警部がやって来た。

目暮「おお、高木君、それにこ、コナン君に哀君に阿笠さんじゃないですか」

コナン「警部、皆が見ていない時は工藤って呼んでもいいですよ」
目暮「ああ、そう、今から組織の下っ端の取調をするんだが……
付き合わないか……」

もちろん別室で取調の様子を見るだけだがな。どうだ」

コ・哀・博「はい、見ます」

こうしてコナン達は別室に呼ばれた。

様子を見る、といっても、隣に続く小さな鉄格子越しに見るだけだが……

十分ほど経つと取調が始まった。

部屋には組織の下っ端の者、目暮、高木と取調の内容をメモる係の人がいた。

下っ端「私の名前は歌川弘典うたがわひろのりと言います」

高木「コードネームは？」

歌川「私は下っ端なのでコードネームはついていません……それに組織からは抜けました……」

目暮「組織の事で何か知っていることは・・・」

歌川「そ、それは言えません!!」

高木「言った方がいいですよ」

歌川「・・・分かりました。知っていることだけを言います。まず組織の名前は「ブラックスパイダー」といって本部は東京に、後日本には

大阪、北海道、九州に支部があるんです。外国にはアメリカ、イギリス、

などと世界に百ぐらい支部があると聞いたことがあります」

目暮「ジン・ウォツカの事は・・・」

歌川「知りません・・・」

目暮「そうか・・・」

別室

コナン「そんなに重要な話じゃなかったな」

哀「ええ、でも、これで分かったわ、組織を壊滅させるには

・・・遅くても一年くらいかかるって事を・・・」

コナン「ああ」

博士「哀君・・・歌川って人は何をやっていたんじゃろうか・・・」

・・・」

哀「さあ・・・」

取調室

目暮「では・・・組織の目的はなんなんだ・・・」

歌川「知りません・・・でも、たった一つ・・・」

ある薬の完成が一つの目的だと聞いた事があります」

高木「薬？」

歌川「はい・・・組織でも上の人だけが知っている・・・」

高木「その薬について……聞いたことはないんですか？」
歌川「その薬が目的で今まで五十年も活動してきたそうです……」
目暮「そうですか……」
歌川「私の知っていることはこれだけです……」

別室

コナン「灰原……あの人が言っている薬の事について、知っていることは無いのか？」
哀「ちらつとならあるわ……」
博士「んで、何を知っているんじゃ……」
哀「『その薬が完成したら、この世は俺らのもんだ』ってジンが言ってるのを聞いたことがあるわ」
コナン「その薬は……兵器……ってことか……」
哀「ええ……たぶん……」
博士「じゃあ……早く薬の完成を阻止しないと……大変な事になるってことじゃな」
哀「そうね……」
コナン「そんな薬、この世には要らないな」
博士「じゃな」

事務所に帰ったコナンはテレビのスイッチを付けた。
蘭は園子と買い物に、小五郎は仕事で居ない。コナン一人だ。
付けたテレビには日売テレビのニュースバラエティー番組「昼時ド

ツキリ」

の司会者の稲生和則いのつかずのじがある歌手の浮気疑惑のニュースをやっていた。コナンは当然そんなニュースには興味がなく、パパッとチャンネルを変えると

テレビの電源を切った。

切ったとほぼ同時に事務所の電話が鳴った。

・・・・・・・・・・・・・続く・・・・・・・・・・・・・

第七章・・・大阪からの使者!?

八月六日午前九時・・・米花駅・・・

あの二人がやつて来た!!

和葉「蘭ちゃん!久しぶり!」

蘭「和葉ちゃん!」

そう、あの二人とは和葉・平次の二人である。

平次「よおつ、おっちゃんに、ねーちゃんに、く、いや・・・」

コナン君・・・」

平次はコナンの所にやってきて小声でこういった。

平次『工藤、久しぶりやなあ』

コナン『おい!何できたんだよ!こっちは忙しいって言うのによ』
とか何とか話しながら東京の繁華街を歩く。

先頭は蘭、和葉。

ちよつと遅れてコナン、平次。

一番最後に小五郎、という順番で歩いて行く。

大体なんで東京に例の二人がやつて来たかというと・・・

前日の午後二時・・・事務所・・・

RRRR RRRR RRRR・・・

事務所の電話が鳴った。

コナンが取つてみると・・・

平次「もしもし、工藤か?オレや、オレ」

コナン「ああ、服部か・・・何のようだ」

平次「はあ？」

コナン「だ・か・ら・何の用で電話したんだ？って聞いてるんだよ！」

平次「いや、明日な東京に行こうと思っただけだ」

コナン「何で来るんだ？」

平次「阿笠っちゅー爺さんから、組織がお前の正体を探っている。

と聞いてな、もし組織がもう百パーセントお前の正体に感じているとしたら……」

まあ、要するに、『工藤の助けが出来る友達はオレしか居ない』と言われたんや。

てま、そんなことや」

コナン「おいおい……（^^）」

平次「じゃ、明日、ヨロシクな……」

ツーツーツ……」

電話が切れた。

平次が一方的に切った。

コナンはちよつと怒った様に受話器を乱暴に切っていた。

話は戻って米花駅付近の商店街

和葉「じゃ、男は男、女は女。分かれて観光しようで！」

平次「そやな。誰かさんの荷物もちにされんで……」

話していた平次がふつと目を和葉に向けると……

和葉が拳を握って平次を睨みつけていた。手には赤い筋が……

このままじゃあ和葉の合気道の技に掛かってしまう。

その時コナンが助け舟を出した。

コナン「もうそろそろ二手に分かれなない？」

和葉「そ、そやなく……アハハハハ……」

和葉の怒りは収まった……たぶん……

もし助け舟が出なかつたら大変な事になっていただろう……想像するだけで怖い……

そんな事はどうでもいいが……五人は二手に分かれる事にした。

しかし、小五郎は事件で米花署に行くから正確には四人ということになるかな……

コナン・平次は話をするためにどこかの喫茶店に入った。

平次はアイスコーヒーを二つ頼むと話を始めた。

平次「正体を感じてゐるってどーゆー事や」

コナン「博士から聞いたんじゃないのか？」

平次「いや、そんなに詳しく聞いてないで」

コナン「そうか……なら話すぞ！」

実は……おっちゃんのかかわった事件の調書が警視庁から盗まれたんだ。

今度はそれだけでない。少年探偵団、博士のかかわった事件の調書も盗まれたらしい……」

平次「な、なんやて……」

コナン「この前も同じ様な事件があったから……な」

平次「せやな……だんだん大変な事になつとるな……」

コナン「ああ……」

平次「……おつ、きたで！」

店員さんがアイスコーヒーを二つ持ってきた。

コナン・平次はストローを袋から出すとストローをコップに差してズツと飲んだ。

沈黙……

「……」

「……」

コナンは千円を取り出した。

コナンはさっさと勘定を済ませると店の外に出た。

店員「有り難う御座いましたー」

コナン「ありがたかねーよ!!」

そう思うコナンだった……

ここは警視庁、

目暮警部、高木刑事がコナンを待っている。

高木「工藤君、遅いですね」

目暮「そうだな」

高木「でもビックリですね。毛利さんの推理が全て、工藤君の推理だったとは……」

目暮「麻酔銃で眠っていた事もビックリだ。なあ、高木君」

高木「ええ」

目暮「たった一つ、この事（コナン＝工藤新一って事）は必ず口外しない様に！！もし、もし……」

口外したら新聞にバンバン叩かれる。それが影響で組織に正体がバレるって事もあるからな」

高木「分かっています」

そこにコナン・平次が入ってきた。

コナン「すいません。遅くなってしまって」

目暮「服部君も一緒か」

平次「警部ハン、悪いか？」

目暮「いっ……いいや（こいつも毛利君と同じ疫病神だからな……）」

コナン「で、調査結果は……」

・ 調査結果を聞いたコナンは驚いて声も出せずにいた……………

……………続く……………

第七章・・・大阪からの使者！？（後書き）

どうも・・・ryoutaです・・・

とうとう平次が出てきたんですが・・・

関西弁ムズカシイです。

へんな関西弁かもしれないにしないでください・・・
って気になるかな・・・

これからも「破滅へのカウントダウン」よろしくお願いします。

第八章・・・アジト!?

コナン「で、調査結果は」

改まったようにコナンは言った。

高木「実は・・・ジンという人物の事についてなんだ。

ジンという人の本名は酒法仁さかのりじん。両親は二年前、交通事故で他界。

両親は仁を捨てたんだ。一歳のころ」

コナンは平次にひそひそと言った。

コナン「ってことは・・・仁は組織に拾われてジンになった。って

言うのも

ありえるな」

平次「ああ」

コナン「警部・・・他に分かった事は・・・」

目暮「いや・・・ジンについてで調べるのが精一杯だったよ」

コナン「そうですか・・・」

目暮「わかったことがあれば電話するよ」

コナン「くだいようですが一つ、毛利探偵には絶対に僕の正体を言
つてはいけませんよ」

目暮「分かっておるよ」

警視庁を出たコナンたちは阿笠博士の家に直行した。

博士「なあんじゃってえー」

博士の声が家中を木霊した。

声はリビングから聞こえる。

リビングには、博士、哀、コナン、平次がいた。
テーブルにはお茶が四つ、置いてある。

外からはセミの声がうるさい。

哀「警察も必死に捜査したってジンの生い立ちについてだけなんて
・・・」

コナン「それだけ謎に包まれているんだろっな」

平次「工藤と二人で考えたんやが、明日から二人で組織について捜
査しようと思ったんやが・・・」

ええか・・・」

哀「いいけど」

哀はコナンに小声でこういった。

哀「服部君・・・やっぱりこの事件から退いてもらったほうが
いいんじゃない。」

もし怪我でもしたら・・・・・・」

コナンも小声で答える。

コナン「一応言ったんだ、おまえはもうこれ以上首を突っ込まな
いほうがいい」ってね。

案の定、服部は俺の言った事を聞かなかった。服部はこういったん
だ。

『アホ、友達が苦しんでいるのを見て、ほっとけるか？それと同じ
や』ってな。

この言葉で分かった。「服部は覚悟はできているな」と

「おい、二人で何喋ってんのや？」

平次が発した言葉に二人はビックリしてこう答えた。

「「いいや、何も」」

翌日の八月七日……

コナン、平次、蘭、和葉、小五郎の五人は八時に、ほぼ同時に起きた。

朝食を済ませた五人は今日の予定について話し合っていた。

和葉「私たち明後日まで残るつもりなんやが……かまわんか？」

小五郎「別に居てもかまわんが……」

和葉「んで……どこ行く？」

平次「オレは用事があるからこのボウズと一緒に行くで」

蘭「じゃあ私たちはトロピカルランドに行かない？」

和葉「それ賛成や!!」

小五郎「オレは仕事がある」

コナン「おじさんは忙しいね」

小五郎「つたりめーだよ」

そういうと平次がコナンに小声で話しかけていた。

平次「あのおっちゃん、仕事、多いなあ」

コナン「工藤新一が公に出なくなったから、工藤新一への依頼は全部おっちゃん

にまわってるらしい」

平次「ほおー」

コナン「まあ、五十パーセントは浮気調査だけだな……」

てなことで、蘭、和葉はトロピカルランドに、小五郎は浮気調査にそしてコナン、平次は組織の手がかりを探すために一旦博士の家に行く事になった。

阿笠邸には、博士と哀の二人が居た。哀は今、地下室で実験をやっている。

そんな事を説明しているとコナン、平次が入ってきた。

コナン「博士えー、入るぞおー」

コナンは躊躇なく入った。いつもの事だ。
平次も同時に入った。

平次「んで、どーやって調べるつもりなんや？」

コナン「服部はインターネットカフェ、オレは図書館に行つて調べ
る」

平次「ネットカフェは分かったんやけど……図書館はなあ……」

コナン「大丈夫だつて」

平次「お互い分かつた事があつたら携帯に電話せーよ」

コナン「分かつてるつて」

博士「二人とも、頑張るんじゃよ」

コナンは博士の家を出ると、図書館に直行した。

スケボーを使ったので早くついた。

図書館に着くと真つ先に新聞の記事をスクラップしているコーナー
に行く。

コナン「(えーつと……オレが小学一年生の姿の時……灰原
がきたのが……」

月×日だから……あつた。これだ)」

コナンが開いたスクラップ記事には、大きく『薬品会社炎上!!』
と書いていた。

コナンは一通り記事を読むとコナンは気にも留めずにこう呟いた。
コナン「そんなに手がかりになる事は書いてないな……」

そこにコナンの携帯が鳴った。

着信音は普通のベルだ。

着メロ等にはまったく興味がない。

コナン「服部か、手がかり、見つかったのか？」

服部「んんや、全くダメや」

コナン「そうか……」

平次は大阪に帰る直前まで、手がかりを探し続けた。しかし、手がかりは見つからなかった。

平次が帰ってから七日後（八月十四日）……
事件は急展開を迎える……

「なんだってえ……!!」

一分後……

「なんやて……!!」

二人は電話をしているらしい。

……なら、なぜこんなに驚いているのだろうか……

答えは電話の内容にあるらしい……

さかのぼって電話の内容を聞いてみよう。

一分ほど前……

毛利探偵事務所の電話が鳴った。

コナンが取ると平次からの電話だったらしい。

平次「くっ、工藤か……俺や、俺」

コナン「服部か……」

平次「てっ、手がかり……組織の手がかりが見つかったんや！」
「！」

どうやら相当焦っている……いや、興奮しているらしい。

コナン「手がかりい？」

コナンはどうかやら半信半疑らしい。

平次「アジトやアジト！！組織の本部の場所が分かったんや！！」

コナン「なんだってえ……！！」

平次「場所は……利善町三丁目にある『メーガー』という時計のメーカーの

ビルや。地上十階建てのビルで社長は『和田隆史』わたたかしっていうらしいで！！」

コナン「なっ、なんだってえ……！！」

平次「和田隆史、知ってるんか」

コナン「知ってるって何も……警視庁の刑事だよ」

平次「なんやて……！！」

なんやて、の言葉を最後に二人は黙ってしまった。

コナン「そうだ！！」

平次「なんや」

平次は素っ気無く答える。

コナン「昨日、警視庁に盗まれていた調書が全て送り返されてきた……」

平次「注意しとけよ……工藤。もしかしたら送り返されてきたってことは

調べ終わったってことや……。あのねーちゃんと一緒に狙われるかもしれない」

コナン「オメーもだぞ、あいつら（組織）のやり方じゃあ確実に俺らに関わったお前も

消しに来るかもしれないからな」

平次「わかっとなるって」

コナン「じゃあ俺はその時計会社と和田って言う刑事のことを調べるから。」

服部は「……………」

平次「俺は大阪にある組織の支部についてしらべたるわ」

コナン「おっ、お前、何でそれ……知ってるんだ……」

平次「爺さんに聞いたんや」

コナン「なーんだ、博士か。ビックリして損したぜ」

平次「さよか……」

コナン「じゃ、大阪にある支部について、調べておいてくれよ」

平次「了解!!」

コナン「じゃ、切るぞー。蘭が帰ってくるから」

コナンは電話を静かに切ると、事務所を出て行った。

コナンの行く先は博士の家だ。

「なんじゃってえー組織の本部の場所が分かったじゃとおー!!」

この声は……博士。

コナン「声がでえって」

博士「おお、すまんすまん」

コナン「俺は明日、APTX4869のデータを本部から奪ってくる」

「やめなさい!!」

その声は哀だ。

哀「あなた何言ってるか分かってるの？少しは冷静になりなさい。

あなたなら分かるはずよ。十万人くらいの馬鹿でかい組織、その

組織の本部って言ったらどれだけデカイか。その組織にそんな姿で

一人で突入するってことは自殺と同じよ!!」

コナン「冗談だよ！冗談!!」

哀「こんなときによく冗談が言えるわね」

コナン「一つだけお前に言いたいことがある。逃げたくないんだよ。もともと俺の関わった事件だ。警察なんか任せられるかよ」

哀「分かったわ。でも一人では危険だわ。協力してくれる人がいないと」

コナン「でも、誰に協力してもらうんだ？」

哀「ジヨデイ先生……FBIの」

コナン「おい……FBIで知り合いって言ったら少ないぞ……」

哀「誰も協力しないよりは良いと思わない？」

コナン「それもそうだ」

博士「やっぱり警察に協力してもらったほうが……」

コナン「そんなのはつきりしない……いや……」

そんな不十分な証拠で協力してくれると思うか？」

博士「そう言われてみればそうじゃ」

哀「目暮警部なら協力してくれるんじゃない？」

コナン「明日、一応聞いてみるか……」

翌日……

コナンは、捜査協力を頼むために警視庁に行った。

警視庁には事前に連絡を入れておいたから入り口には目暮警部達が待っていた。

目暮「待ってたよ……く、いや……コナン君」

高木「とにかく行きましょう」

そんなやり取りをすると会議室のようなところに来た。

会議室は十五畳位の部屋に白の机とこれまた白の椅子が礼儀正しく並んでいる。

コナンと目暮警部、高木刑事、千葉刑事、多摩川刑事が椅子に座った。

目暮「早速だが……工藤君、組織の新情報を入手したっていうのはどういことだね」

コナン「組織の本部の場所が分かったんです」

高木「ブラックスパイダーの？」

コナン「はい」

千葉「場所は……」

コナン「利善町三丁目の『メーガー』っていう時計の会社のビルです」

高木「社長の名前は……」

コナン「驚かないくださいよ……和田、隆史……」

千葉「和田って言ったなら……新米の……刑事じゃないか!!」

コナン「おそらく組織の一員で、警察にスパイを送ったんでしょう」

高木「思いつきりなめられていますね」

目暮「おいおい……ってことはあの時（第五章参照）……聞かれたんじゃないかね」

コナン君は工藤君って事……」

高木「そ、そうですね……」

コナン「とにかく協力してほしいんですよ。組織を倒すのに」

目暮「……いいでしょう」

コナン「他にはジョディ先生に協力してもらうつもりです」

目暮「一応明日毛利た……」

コナン「博士の家にして頂けませんか？」

目暮「いいだろう」

コナン「ところで……和田刑事ってどんな人ですか？」

コナンはさりげなく和田について聞いた。

高木「ここ最近入ってきてね……年は三十歳。

九州の警察からここ（警視庁）にやってきたって聞いたよ。

家族で父親は事故でお亡くなり、母の方も、病気でのお亡くなりになったと言っていたよ」

コナン「そうですか……」

ここで黙っていた多摩川刑事がコナンに小声で話しかけた。

多摩川「今日用事があるから、君の家に行っていいかな」

コナンは正直戸惑っていた。

コナン「えっ、あっ、はい……………」

目暮「じゃあ、これから仕事があるから……………」

コナン「ではこれで……………」

コナンは多摩川刑事の車で探偵事務所ではなく……！！
阿笠博士の家に向かった。

さて、多摩川刑事の正体とは誰か！

気になる方は次を見てね！！

……………続く……………

第九章・・・作戦会議と平次の気持ち

「なんだってー、日本で潜入捜査!?」
コナンの馬鹿でかい声が家中響いた。

そう、多摩川刑事は国際警察機構インターポールの捜査官で、「ブラックスパイダー」を追っている捜査官なのだ。

多摩川「工藤さんが知っている組織の情報。全て教えてくれませんか?」

コナン「分かりました」

コナンは教えた。

杯戸シティホテルで起こった出来事（二十四巻参照）

システムエンジニア、板倉さんのフロッピィを巡っての事（三十七巻～三十八巻参照）

ベルモットの事・・・（四十二巻参照）

など全て、包み隠さず。

どうやらコナンはこの人は「信用出来る」と思ったのだろう。

探偵の「勘」がそう思わせたのであるう。うん。

多摩川「優作さんからは話を聞いています。しかしそんな事があつ

たなんて・・・」

博士「多摩川さんに協力してもらってはどうかね」

コナン「いや、警察に協力してもらおうよ。多摩川さんも一応警察官だしね」

多摩川「私もそうさせて頂きます」

こうして(？)コナン・平次・目暮・高木・千葉・警官A、B・多摩川の八人が『組織壊滅作戦』に参加する事となった。

次の日・・・

朝十時に、目暮警部と高木・千葉・多摩川刑事の四人がやってきた。あっ、そうそう、平次もやって来た。

目暮「どうも、工藤君に服部君、そして阿笠さん」

高木「今回は組織『ブラックスパイダー』の本部へ突入するための作戦会議にきました」

ここで組織壊滅の作戦が決まった。

組織壊滅の作戦はこうだ。

組織の本部(メーガ社)には、三つの入り口があることが分かった。

ひとつ目は正面玄関。

二つ目は社員用入り口。

三つ目は今は使っていないと思われる裏口だ。

作戦では社員用の入り口と裏口を利用する。

A班（平次・コナン・多摩川・警官A）は裏口から、B班（目暮・高木・千葉・警官B）

は社員用入り口から突入する。

両班で一階を制圧（？）したあと、B班は二階に向かう。

・・・ここでひとつ。

実は、組織の本部のビルを作るのに協力した人と歌川により、本部のビルの中は

全て何があるか分かっているのだ。

二階には一課、二課、三課と経理課がある。

（そのときコナンは「組織って意外と会社みたいなんだな」と思った）

そこはB班が担当、

A班は三階に。

三階は組織の新人養成が行われている。

そこはA班が行く。

と、こういう調子で七階まで行く。

七階には海外事業部という部署がある。ここからかく支部へ、情報が送られている。

ここには組織のメインコンピュターとやらがあるらしい。

そのメインコンピュターからの情報を切断すれば支部はパニックに陥る。と思われる。

ここを潰したら、後は八階のジン、ウオツカからの寝床。

九階の会議室。

そして十階のボスのいる部屋だけになる。

・・・

・・・

・・・

・・・

（その後の作戦は省略）

説明を終えた多摩川はこういった。

多摩川「とまあこんな作戦で行きます」

目暮「これは多摩川君が作ったんだよ。中々いいんじゃないかい」

高木「工藤君、服部君。いいのかい？この作戦に参加したら、死ぬかもしれないだよ？」

コナン「いいんです。これは僕の関わった事件です。

僕自身でも作戦に協力したいんです。そうしないと気がすまないんです」

高木「服部君は……」

平次「俺もや。俺は工藤の正体を知ってしもたんや。後戻りはできへん。

それに……」

みんな（平次以外）「それに……？」

平次「工藤の親友として、協力したいんや……」

もし警部ハン。親友が困っていたら、どうする？見て見ぬ振りか？それはないで！

俺なら相談だけでも乗る。苦しんでいる顔を見たらどうしても見放せないんや。

工藤は表では平然を装っている。裏では悲しい、辛い顔をしている。あのねーちゃんにつきたくない嘘をついている時の裏の顔。俺は知っているで。

悲しみではち切れんばかりの顔……俺は工藤に普通のいつもの生活に戻してやりたい。そう思つとる。決して後悔せえへん」

みんなは平次の熱弁を聞いていた。

コナンはしんみりと平次の熱弁を聞いていた。

もしコナンの母（有希子）がこれを聞いていたら「いい友達を持つ

たわね「というだろう。」

コナンにとって平次とは
切っても切れない縁・・・いや、
一番の「心の友」なのである。

・・・続く・・・

第九章・・・作戦会議と平次の気持ち（後書き）

どうも、作者のryoutaです。

とうとう作戦会議をしました。

・・・

しかしまだ足りない人が居ないのに気がつきましたか？

それは・・・

それはこれからも見ていただいたら分かります。

つてことでこれからもこの小説「破滅へのカウントダウン」を
よろしく願います。

第十章・・・ドツキリなパーティー

八月二十日・・・午前七時半・・・

コナンら少年探偵団＋哀は学校に登校していた。

今日は出校日だ。

出校日は八月五日と・・・今日である。

コナンは実は、組織壊滅に協力するために、「今日を持って転校」という形になっている。

元太、歩美、光彦はこのことを知らない。

知っているのは五人の中で哀とコナンだけとなる。

事務所には江戸川文代として有希子から電話があったから小五郎と蘭は転校を知っている。

当然電話はコナンが頼んだ。

昨日電話があった後、蘭は悲しそうな表情でコナンを見つめていた。小五郎は「ガキがいなくなると思うとせいせいする」とか何とか言っていたが、

内心は悲しんでいるらしい。

「コナン君は、今日を持って、転校することになりました!!」

朝、みんなの前で担任の教師がそういうとみんなは・・・

「ええええー」

と驚いていた。

隣の席だった光彦が、

光彦「コナン君、転校しちゃうんですか？」

と話しかけてくる。コナンは素っ気無く

コナン「ああ」
と答える。

休み時間になってもコナンはなんとなく素っ気無い。

休み時間、教室でボーっとしていたコナンに元太、歩美、光彦が話しかけてきた。

元太「コナン、転校するの？」

歩美「転校しちゃうの？」

光彦「何で教えてくれなかったんですか？」

と聞いても・・・ボーっとして答えてこない。

元太がコナンの体を激しくゆする。

やっとコナンが我に返った。

コナン「お前ら居ったのか」

歩美「コナン君、転校しちゃうの？」

コナン「ああ」

光彦「今日は午前中授業なので、昼から博士の家に来ていただけませんか？話したいことがあるので」

コナン「いいけど・・・博士に聞いたのか？」

光彦「ええ。もちろん良いつていましたよ」

キンコーンカーンコーン・・・

チャイムが鳴る。

皆が自分の席に着いた。

授業が終わった。光彦が言ったように今日は午前中授業。

時計の針は十一時半を指している。

下校時間だ。

コナンら少年探偵団と哀はいつも通り帰る。

帰り際にコナンの転校の話になった。

歩美「コナン君が転校しちゃうと寂しいなあー」

歩美はコナンが好きだから、寂しいのは当然の事だ。

光彦「コナン君、何処の小学校に行くんですか？」

光彦は学校のことに興味があるらしい。

コナン「(何処にするかな・・・んなもん決めてねーよ)・・・

・・・北海道かな・・・」

光彦「コナン君の両親ってロスにいるんじゃないんですか？」

コナン「(げっ・・・)ほ、北海、北海道に引っ越してきたんだ

よ」

コナンは適当に北海道にした。何でそうしたか・・・定かではない。

元太「いいなあー・・・北海道。食い物いっぱいあるぜ。カニだろ、サケだろ・・・」

元太はよだれを垂らしながら考える。

コナン「(元太は食べ物のことばかりだな・・・相変わらず・・・)

」

とか何とかワイワイガヤガヤしゃべっていると光彦が話を切りだした。

光彦「コナン君、最後に話がしたいので・・・午後一時に、

博士の家に来ていただけませんか？」

この後も元太、歩美、光彦はワイワイガヤガヤ話す・・・

コナン「(うるさい!!)」

午後一時・・・博士の家

コナンが博士の家に行くとき元太達はもう来ていた。

ある部屋には哀、元太、光彦、歩美が居た。

コナン「（おいおい、どんな話なんだ？光彦、相当深刻な顔してるぞ・・・）」

光彦「さて・・・単刀直入に行きます。コナン君は、工藤新一さんですね」

コナンはそういわれてもまったく驚かない。

コナン「ほおー。根拠は？まさか光彦が根拠もなしにそんな事言うわけないよな」

コナンは自信ありげにそう言う。

光彦「まずは知識の豊富さです。まさか小学生がそんなに知識があるっていうのはおかしいです」

コナン「そりゃないぜ・・・光彦！おめえだってそれなりの知識あるじゃねーか」

コナンは呆れるように答える。なかなかの演技力だ。うん。

光彦「まだあります。何故車の運転できるんですか？あの時・・・

（天国へのカウントダウン参照）

コナン君・・・いや、新一さんですから・・・できるでしょうね」

コナン「ははは・・・ずいぶんと穴があるな。そんだけじゃあ何の根拠でもない。

大体俺は新一兄ちゃんではない！」

コナンは笑いながら言う。
光彦「ちよつと、まずは僕の推理を聞いてください。新一さんはある組織の取引を見た。

そして組織の人に毒薬を飲まされてしまう。そして体が縮んだ。正体がばれてはいけないと思った新一

さんは江戸川コナンと名前を偽って生活することにした。そうなったコナン君は学校に行って

小学生の振りをした。そのまま時が流れていった。そして灰原さん

が転校してきたんです。

灰原さんはコナン君と同じく体が縮んでいるんですね」

コナン「（当たってる・・・）おい、そんな薬があったらこの世の中大変なことになってるぜ。

それに灰原も俺も小学生だ」

（コナンは小学二年生という設定です・・・言い忘れてすみません）
コナンはまだ焦っていない。哀は黙って話を聞いている。

哀「江戸川君にちょっと話があるから・・・向こう行ってくるわ」

哀とコナンは静かにベランダに出た。

コナン「話って何だよ」

哀「円谷君達のことよ」

コナン「ああ・・・」

哀「あの子達・・・貴方と私の事を疑っているわ。どうするつもり？」

コナン「おい、子供まで巻き込むわけじゃないだろ」

哀「って事は、隠し通すって事？」

コナン「ああ」

哀「・・・吉田さんや小嶋君ならともかく・・・円谷君は、そう簡単に騙せないわよ」

コナン「分かってるよ」

哀「じゃあ、戻るわよ」

哀とコナンは、光彦らが待っている部屋に戻った。

光彦「話の続き・・・していいですか」

コナン「ああ」

光彦「コナン」工藤新一だっていう事を裏付けるものは・・・」

歩美「私から話すわ。まず、工藤新一さんが謎の失踪をしたのは蘭お姉さんとトロピカルランド

に行った月日。そして、コナン君が事務所に居候する事になったのも月日。

同じ日についていうのは偶然じゃ済まされないわ。それは蘭お姉さんから聞いたのよ」

光彦「それに、工藤新一さんの誕生日は五月四日。コナン君も五月四日」

元太「工藤新一の子供の姿の時とコナンの顔は似ているしな……」

コナン「おい、ちょっと待てよ。確かに新一兄ちゃんの子供のころと俺は似ているかもしれない。

でも『他人の空似』っていうのもあるし、俺と新一兄ちゃんは遠い親戚に当たるんだ。

似るっていうのも当然有り得るだろ。それに……」

光彦はまだ腑に落ちない模様。

コナン「あの時俺と新一兄ちゃん、一緒に居たじゃねーか!!(二十六巻参照)」

そう、コナンがあの時退院したあと、登校したとき、変装したコナンの姿の哀と新一と一緒にいるのを

光彦達は見ていたのだ。

光彦「そ、それは……」

光彦はどうしても腑に落ちないけど……という顔をしている。

元太「おい、早くアレ、しねーか……(やべっ)」

光・歩「元太君!!」

実は歩美たち、ドッキリをしてコナンをビックリさせるつもりだったらしい(光彦は違うみたいだか)

それと、お別れパーティーをする事は隠していてこれも驚かすつもりだったんだが……元太のせいで……

コナン「何をするんだ?」

光・歩・元「(やばっ!)」

光彦「いやー、コナン君のお別れパーティーを……」

コナン「へえー……ってえええええ……」

な、なんとかドッキリ成功したみたい。

その後コナンは、リビングに通された。

リビングに入ると、所々装飾がしてあって、光彦らのほかに、博士、哀、蘭がいた。

その後盛大なお別れパーティーが行われた……………。

……………続く……………

第十一章・・・コナンとの別れ

パーティーは盛大に行われた。

クリスマスでも無いのにテーブルの真ん中には七面鳥が皿に図々しく乗っかっけていて、

その皿の周りにはから揚げだったりミネストローネだったりポテトサラダなどが

所狭しと並んでいる。おそらく哀と蘭が作ったものだろう。

コナンの目の前では元太が七面鳥にかぶりついている。

もうコナンの事はどうでも良いって感じ。終始かぶりつく。

歩美と蘭は俯いて無言。コナンとの別れが相当シヨックなのだろう。

光彦は悲しみを隠しているようだが明らかに動揺していた。時々首を左右に振る。

博士と哀はコナンの事情を知っていたのでいつも通りの表情。

いや、博士はオヤジギャグが出るほどの元気さだ。

博士「肉を食べるなんて憎いのう・・・ふほっほっほっ」

ひゅ〜

北風が通り抜けたような寒さが皆の背筋を伝った。こういうときに太陽はやって来ない・・・

誰も突っ込まないのだ。というか若干二名呆れてはいるが。

誰からも突っ込まれないどころか、皆の元気をつけようと言ったギヤグが皆の元気をなくして

てしまった。終いには起こられている。

歩美「こんなときにそんな事を言わないで・・・ぐすんっ」

歩美は泣き出してしまった。コナンは小声でオイオイと呟く。

元太「そ、そうだぞ。コナンが居なくなるってーのに」

光彦「そうですねっ！！」

博士はまさかココまで攻められるとは思わなかったので思わず顔を顰めた。

ココでやっとコナンのて来た。

コナン「まあまあ。もう会えなくなるってワケじゃねーんだから」

コナンは後半の言葉に力をこめる事は出来なかった。

もしかしたら本当に会えなくなるかも知れないから。

コナンはトイレと言ってパーティー会場から離れて博士の家のベランダに出た。

コナンは悲しい顔をしている蘭と歩美の二人を思い出して思わず唇を噛んだ。

自分の所為で、自分の存在が二人を苦しめている。

一回哀がこう表現した事があった。

「居なくなった人の思い出は綺麗なままで封印されて、一生その人の心に居座り続ける・・・」

と。居なくなった人とはコナンで、その人とは歩美、蘭の事だ。

特に歩美はコナンの事が好きだ。コナンはその事につすつす気づいていたのだ。

コナンは哀の言った言葉が自分に重なってしまふ。

コナンの思い出は綺麗なままで封印され、一生歩美の心に居座り続ける・・・

もしかしたらコナンの思い出が歩美の今後に響くかもしれない。

コナンの思い出が歩美の恋を妨げてしまふかもしれない。

とコナンは思う。いくら恋愛に鈍いコナンでもこの想像は容易にいついた。

コナン「やっぱり俺の正体を皆に話しておいたほうがいいのか・・・」

とコナンは思わず口から漏らした。

「やめなさい」

クールな声がコナンの耳に入った。

コナン「灰原、聞いてたのか・・・」

哀「ええ。あなたが哀しそうな顔して部屋を出て行ったからね。こんな事くらい容易に想像できたわ」

コナン「ハハハ・・・」

コナンは哀から眼をそらした。

哀「感情に流されて正体をバラスのは止めなさい。子ども達は巻き込んではいけないわ。もちろん彼女

にも。組織の事は必ず漏らしてはならないわ。絶対にね」

コナン「わぁーってるって。もちろん誰にも話さない。でも歩美ちゃんとは別だ。すべてが終わったら

歩美ちゃんには話さなければいけないと思っている」

哀「そうね、まあそれは後から話し合いますよ。とにかく早く戻るわよ。

あの子達が心配してやってくるから」

コナンが会場に戻ったあとも、パーティーは盛大に行われた。

元太はコナンそっこのけで食べ物にかぶりついていた。光彦は真剣な顔をしてコナンを眺めていた。

一度、二十分くらい、コナンが会場から抜けたことがあった。が、しかし皆は気に留めなかった。

歩美と蘭は、食べ物も口に入らず、ただ俯いているだけだった。そしてパーティーは終盤。

食べ物にかぶりついていた元太も、皆、無言になり、食べる事を止めた。ここは一瞬静寂に包まれた。

.....

無言。

最初に口を出したのはコナンだった。

コナン「最後に、俺から一言。言いたい事がある」
そう言うとコナンは席を立って前に出た。

コナン「最後に、俺からいいたいことがある・・・ と言っても言
いづらいからさつき手紙を書いてきた」

コナンは何処からか手紙を出した。一つ目は光彦、元太宛て。二つ
目は歩美宛て、三つ目は蘭宛てだ。

コナンは光彦、元太に手紙を渡すと、歩美に手紙を渡した。コナン
は歩美に手紙を渡す際、ある言葉をかけた。

そして・・・ 蘭に手紙を渡した。

コナン「蘭姉ちゃん。今まで有難う。小五郎のおじさんにも有難う
っていつといてね」

蘭の眼から涙が零れた。落ちた涙は頬を伝い、床にポトリと落ちた。
コナンは蘭を見て一瞬悲しい顔をして、蘭から視線をそらす。

コナン「皆、今まで有り難う。じゃあね」

コナンは皆に背を向け、部屋を出た。皆もコナンのあとを付けて部
屋を出た。

・・・続く・・・

第十一章・・・コナンとの別れ（後書き）

どうも、作者のryoutaで御座います。

とうとう十一章到達！！ココまで続けられたのは皆さんのお陰です。パーティーはこの章なのに前章にパーティーというのが題名に付いている・・・

このごろ題名に困っているんです・・・迷っている割に題名は単純なのは見逃してください。

と・に・か・く！！これからも破滅へのカウントダウンを宜しくお願ひします。

第十二章・・・手紙・蘭、光彦、元太編・

コナンは江戸川文代に変装した工藤有希子に引き取られて行った。そしてパーティーはお開きとなった。

パーティーがお開きになった後、光彦と元太は手紙の封を開こうと思いい、手紙を握っていた。

外はもう夕日が沈んでいたみたい。大分暗くなっている。

と言う事で博士の家からは出た。いくらなんでも博士には迷惑かな、と思ったからだ。

外に出た二人は顔を見合わせ、「うん」と相槌を打った。光彦は手紙を大事そうにポケットにしまう。

二人は手紙の内容が凄く気になっていたがもう時間も遅い。

手紙は明日、見る事になった。一人では見難いからだ。

元太「じゃーなー」

光彦「ええ。さようなら!!」

そう言うと二人は家路を急いだ。

蘭はパーティーが終わった後、足早に探偵事務所に戻った。そして来客用のソファアに座って、

泣いた。泣いた。泣いた。涙が枯れるまで泣いた。泣き続けた。

蘭は泣き止んだ後、ポケットから手紙を取り出す。封を切ると手紙を開いた。

蘭は手紙を声に出して読んだ。

蘭「蘭姉ちゃんへ。こうやって手紙を渡すのは最初で最後になっちゃうんだね・・・」

蘭姉ちゃんと過ごした日々、とっても楽しかったよ

蘭姉ちゃんと会ってからいろいろなところに行つたよ。ハウステンボス、甲子園、京都、トロピカルランド・・・ボクが銃で撃たれたとき、血を分けてくれたね。ボクが風邪を引いたときも付きっ切りで看病してくれたね。ボクはこれまでの日々がとつても短く思えたよ。楽しかった。有り難う。

蘭姉ちゃんの笑顔、ボク、一番好きだったよ・・・」

蘭は、読み終わったとたん、クスツと笑った。

これはコナンに宛てた笑顔だった。「笑顔・・・好きだったよ」と書いたコナンに宛てた精一杯の返事だったのだ。

蘭は手紙を丁寧に直すと、夕飯の準備を始めた。

小五郎「おい、蘭、今日の夕飯は何だー！」

いつもの小五郎の声が聞こえてきた。

蘭「今日はコナン君の好きだったハンバーグよー!!」

蘭はコナンとの日々を思い出して一つ哀しい顔をしたがまたいつもの顔に戻り、包丁で野菜を切っていた。

翌日（八月二十一日）

十時。光彦と元太の二人は公園に来ていた。

夏休みとあって子どものはしゃぎ声が聞こえている。木にはセミが停まっていて、ミンミンと

鳴いている。二人は公園のベンチに腰をかけた。蒸し暑い。今日の

天気予報で最高気温は三十四度と言っていた。

光彦は額の汗を拭くとポケットから手紙を取り出した。光彦は手で封を切り、手紙を広げた。

光彦が手紙の内容を読み始めた。

光彦「光彦、元太。今までありがとう。初めに言っとく・・・

俺とお前らが始めに知り合ったの、いつだか覚えてるか。

あの不気味な館に探検に行った時だったな。

あの時から、少年探偵団は始まったのかもしれないな。

その後、博士からバツ貰って、いろんなところで事件を解決したよな、覚えてるか？

映画館、図書館、ツインタワー、城、洞窟・・・

光彦。洞窟で俺が撃たれたとき。名推理を披露したって聞いたぞ。

俺がいなくなっても、光彦、少年探偵団を宜しくな。

元太、食いすぎて腹壊すんじゃないぞ。

一応お前少年探偵団の団長なんだから。

光彦「最後に二人へ。お前ら、俺がいなくなっても頑張れよ！！・・・
・・・書いてました」

二人の瞳からは自然に涙が零れ落ちた。

と同時に二人はコナンに心の中で「ありがとう」と告げていた。
今までのお礼として・・・

・・・続く・・・

第十二章・・・手紙・蘭、光彦、元太編 - (後書き)

どうも！！作者のryoutaです！！

今回は手紙って事で「コナンの手紙を蘭たち三人が読んだときの感想」

をテーマに書いたつもりだったんですが「コナンの手紙を読むまで」って感じになってしまっています。だからコナンの手紙を読んだあとに感想が殆どないっ！！

そこところは勘弁してください・・・

それに手紙の内容があまりにも変！！そこところも勘弁してください・・・

さて、実はこの「手紙」には続きがあります。

蘭、光彦、元太編があるってことは、編も・・・

皆さんはもう、分かりましたよね！！

その「手紙」の続きは近日公開！！（何故映画の予告編っぽいんだ・・・？）

第十三話・・・誘拐

博士の家から出て、もう三十分がたった。

コナンは有紀子とではなく、独りで公園のベンチに座っていた。

コナン「よし、コレでようやく『コナン』という存在を消すことが出来た」

コナンは『コナン』という人物を消したのだ。皆と別れることによつて。

さつきから有紀子が居ないが、有紀子はどこかというところ・・・

公園の公衆トイレにて・・・

有紀子「ふう・・・、やっぱり変装するって言うのは疲れるわねえ」とぼざいていた。顔から汗がダラダラ流れている。

有紀子は顔から特殊メイクを解いた。バリバリっというしながら顔からメイク

が取れている。ついでに服も脱いだ。服からは無数の毛布が出てくる。

何故、ここまでして、江戸川文代を太らせたかは・・・謎である。

変装を解いた有紀子はいつもの顔に戻っていた。しかし顔には疲労の影が見

えていた。

一方コナンの方はというと・・・

ベンチでうとうと、うたた寝をしていた。その時！！

ブルルルルルッ

携帯電話のベルが鳴った。コナンはバチッと目を覚ます。あわてて

コナンは

電話を取った。電話の相手は博士らしい、携帯のディスプレイに書いてある。

コナン「博士、どうした？」

博士？「どうしたもこうしたもないわよ！！」

コナンは一瞬、博士がオカマになったかと思ったが、電話の相手が哀だという

事に気がついた。

コナン「は、灰原か・・・改めて聞くが、どうしたんだ？」

哀「大変なのよ！！博士が、博士が・・・」

哀は珍しく取り乱していた。声が上ずっていた。

コナン「何だつて！！博士が組織から誘拐されただど！！」

コナンの顔から血の気が引いた。顔が真っ青になる。

コナン「とにかく今から行く。そのまま待っておくんだぞ！分かったな」

そのまま電話は切ってしまった。コナンはトイレの目の前に来て、コナン「今から博士ん家に行つて来る！！」

と叫んだ。その後、急いで博士の家まで走っていった。

その直後、有紀子があわてて公衆トイレから出てきた。

有紀子「新ちゃん！新・・・つてもう！！何で博士の家に行くのかしら」

そう呟いていた。

十五分後、息切れしながらもコナンは博士の家まで戻って来た。

ハアハアといいながらもコナンは博士の家のドアを開けた。

コナン「灰原あーっ！」

哀がコナンの声を聞きつけて来た。

哀「とにかく来て！！」

コナンは哀に連れられて、リビングにやって来た。

リビングにはまだパーティーをした後が残っていた。だが歩美たちはもう居ない。

哀はそのままリビングに座り、博士の携帯電話をいじり始めた。

哀「コレ見て！」

携帯電話のディスプレイが表示していたのはメールの作成画面だった。画面にはこうかかれていた。

『この爺さんは預かった。返して欲しければ、江戸川コナン、灰原哀こと、

工藤新一および、宮野志保。二人だけで港区の黒鳩倉庫に来るよう
に・・・

黒の組織・・・ブラックスパイダーより。』

コナン「・・・た・・・大変だ」

哀「とにかく、大阪の服部君に電話したほうが・・・」

コナン「いや、そんな暇は無い。それに、アイツを巻き込むわけにはいかないだろう」

哀「じゃあ、二人で行くって訳？」

哀の額には汗が伝った。

コナン「ああ。そうするしかないだろう」

哀「目暮警部には・・・電話した方がいいんじゃない？」

コナン「いや、このまま二人で行ってやるうじゃないか！」

コナンはニヤリと笑った。自信に満ち溢れたように。

????「おい！爺さん！！そろそろ、俺らの条件を飲んでくんないかな」

ここは港区の黒鳩倉庫。ジン、ウォツカ、そして和田隆史がいた。

和田はやっぱり

黒の組織のメンバーだったのだ。コードネームはスコッチ。

博士は三人に拷問を受けていた。三人にある条件を飲んでくれとい

われたが、博士は

断固拒否した。その条件はやはり、哀とコナンの事だった。

博士「いやじゃー！！ワシは絶対そんな事せんぞー！！」

ウォッカ「おい！組織を甘く見たら痛い目に合うぜ」

ウォッカは拳銃をちらつかせながら喋る。

博士「ワシは絶対そんな事せんぞー！何が何でもせんぞー！！」

そう博士が断言すると和田が拳銃の撃鉄を上げた。

・・・続く・・・

第十三話・・・誘拐（後書き）

どーも！作者のryoutaです。

とうとう組織が動き出したわけですが、もう物話も終盤に差し掛かりました。

全体的に話の進み具合が遅いわけですが（^^;）

これで最終話へのメドが立ちました。第十五〜第十六くらいで終わるかもしれません。

まあ、信じるか信じないかは皆さんにお任せします。（おいつ!）

つてことで、第十六話まで、首を長くしてお待ちください。（おい

おいつ!~!）

第十四章・・・真相、そして仲間割れ

和田が言っていた「条件」とは何だったのだろうか？時間を遡ってみることにした。

???「おい！わしをどうするつもりじゃ!？」

この声は博士。組織に誘拐され港区は黒鳩倉庫に連れて行かれた直後だった。

博士はただ手を後ろに回され手錠をさせられていただけだったが、しかし近くにはスコッチが見張っていた。

少ししてジン、ウオッカが倉庫に入ってきた。

ジン「おい、オッサン。逃がしてほしいのならば、ある条件を呑んでもらおうか」

ジンは低い声で、あまり顔は見えなかったがポーカーフェイス。

博士「何じゃ！その条件とは!？」

博士はいつもとは違う大きな声で切り返した。

スコッチ「あいつ等を、あの馬鹿な探偵ボウズとあの裏切り者を消すんだよ!？」

スコッチは博士を睨んだ。

博士「嫌じゃ！あんたらの言うことなんか聞かんぞ!！」

ウオッカ「スコッチのやつを言うことを聞いたらどうなんだ？聞かなかつたら・・・」

お前を一生暗闇から抜け出せなくしてやるるか!？」

一生暗闇から抜け出せなくする・・・その言葉に博士は寒気がした。だがしかし、博士は頑としてスコッチの言うことを聞かなかった。

博士「誰が何を言おうと無駄じゃ!！」

少し沈黙が続いた。そしてジンが声を発した。

ジン「まあいい。とりあえず十五分、時間をやるう。そのうちに考

えとけ！」

そうとうとジンら三人は倉庫から出て行った。

そうして前の回の最後に戻ることになる。

博士は頑として聞かなかった。十分、二十分という時間があっても博士の考えは変わらなかった。

博士「ワシは絶対そんなことせんぞ！何が何でもせんぞ！！」
そうとうと和田が拳銃の撃鉄をあげた。

スコッチ「ほう！俺らの言うことが聞けないってわけか！じゃあ俺はアンタをこのチャカでやろうとするが。

本当にいいのか？条件を飲めば、あんたを逃がしてやるんだぞ！」

博士「やれば良いじゃないか！（おい。新一君。お願いじゃ、助けに来てくれ！）」

博士は、コナンが助けに来てくれると信じ、時間を稼ぐことにした。
博士「おい！お前らブラックスパイダーの目的は何なんじゃ！」

いつもは出ないような強い口調で博士は聞いた。

ジン「ほお」。俺ら組織の名前まで知っているとかな……。まあいい、この際だ。スコッチ！教えてやれ！！」

そうジンが言うスコッチが淡々と話し出した。

スコッチ「俺らブラックスパイダーは、昔、飛脚という仕事をやってた。まあ普通に言えば宅急便だ」

スコッチは少し間をおいてまた話し出した。

スコッチ「まあ前までは普通の仕事をしていたんだが、ある依頼を受けてから、変わったんだ。

ある薬を大阪から東京に運ぶように頼まれたんだ。その途中、宅急便の係のやつが間違っってその薬を飲んだ。

その薬は係のやつを一瞬にして殺してしまった。そこで宅急便の社長、俺がこの薬を利用しようと思ったんだ。

薬の配達を頼まれた男らとともにな！」

博士は黙って聞いていたが、話が途切れたかと思うと疑問を投げつけた。

博士「じゃあなんなんじゃ！何であんたら組織は本部を東京に、ましてや時計を作る会社にしたんじゃ！」

スコッチ「わかった、教えてやるう。その薬を完成させるにはあるものが必要だったんだ！そう、パンドラだ！」

博士はパンドラという宝石をなぜほしがったのか疑問に思った。

スコッチ「まあ難しい話はどうでもいい、とにかくその宝石がほしかった。だから時計を作る会社にしたんだ。

でも迂闊に宝石なんぞ盗んだら、俺ら組織の存在がばれちまう。ここである怪盗を利用しようと考えた」

そこで博士は怪盗キッドだと一瞬でわかった。

博士「怪盗キッド、じゃな」

スコッチ「ああ。そいつを利用しようとな。そして利用しようと思つた矢先、薬を取引していたウオツカとオツサンが

あの高校生の探偵気取に目撃された。そして試作品の薬を飲ませた。案の定死んだと思つたんだがな。

まあいい。その何ヶ月かあと、シエリーが逃げた。俺は二人が不思議でたまらなかつた。なぜシエリーが逃げ切つたのか？

あの高校生探偵は本当に死んだのか？とな」

その後、博士が組織に付け加えた。

博士「そこで分かつたんじゃな？二人が幼児化したと」

スコッチ「ああ。まあ正確には盗聴器をあの会議室に取り付けたから分かつたんだ」

スコッチはまるで勝ち誇つたかのような顔をして話した。

博士「あんたらの目的は世界を自分達の物にしようとするのが目的じゃあなかつたのか！」

スコッチ「ああ。それは飛脚をやっていたときのこと。今はそんなこと、毛頭にもないさ！」

スコッチが言い切つた後、ジンがスコッチに向けて拳銃を突き上げ

た。

ジン「ほ〜。『そんなこと毛頭にもない！』ってわけか！だがなあ！俺らはそんな薬、どうでも良かったんだよ！」

ジンの意外な行動にスコッチは少なからず驚いた。だがしかし対抗するようにスコッチも銃を突き上げた。

スコッチ「お前がチャカで俺をやるうとするなら、俺も構わず撃つぜ！」

なぜ、ジンがスコッチを撃とうとしたのか？それはジンがなぜ組織に入ったかにあった。

それはジンが小さいころ、組織のスコッチに拾われたからだだった。

もともとスコッチが嫌いだったジンは、昔組織がたくらんでいた世界征服の話聞いた。

その話を実行させたかったジン。

だがしかし当然スコッチはそんな話、見向きもしなかった。

だからスコッチへの対抗心が募っていったのだった。

説明をしているうちに、スコッチはジンの腹を狙って撃った。だがしかし、掠りもしない。

すかさずジンはスコッチの胸めがけて打った！その弾は、スコッチの右肩を掠った。

スコッチは自分の肩を押さえる。

そこにウォッカがスコッチの腹めがけて撃った。当然掠りもしない。三人が打ち合いをしている間、手錠を外した博士は静かに倉庫を脱出した。

………続く………

第十四章・・・真相、そして仲間割れ（後書き）

どうも、作者の ryouuta です！

今回真相が明らかになったわけですが、ホントすいません！

なんか急に宅急便だの怪盗キッドをだして、話がこんがらがっちゃったかなと思いました。

どうせならキッドを最初に出しとけばよかった・・・（^^；
本当にごめんなさい！

謝罪はそれくらいにして、次回予告！

今回は『あの方』と色黒の名探偵（^^； が登場する予定です！

ああ・・・あと二三話で終われるだろうか・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0443a/>

破滅へのカウントダウン

2010年10月9日17時42分発行